



Q₁: 最近、「バリアフリー」という言葉を耳にしますがどういう意味なのでしょう？

A₁: 「バリアフリー」とは、階段の代わりにゆるやかなスロープをつけたり、つまずきやすい段差をなくすなど障害者や高齢者の生活上不便な障害を取り除くこと（『現代用語の基礎知識』より）をいいます。

最近なぜ「バリアフリー」という言葉が使われだしたかという点、20世紀最後の2000年に日本の65歳以上の人口は17%となり、世界一の高齢化社会の到来の現実を、企業側では、大きなビジネスチャンスととらえていることからクローズアップされてきました。

皆さんが使われる公衆電話の「5」のところの小さいポッチがあるのをご存じでしょうか？

ここにポッチがあるおかげで、目の不自由な方などはここが「5」であるという確認ができるわけです。また、テレホンカードなどの端の丸いへこみなどは、目の不自由な方ばかりでなく、健常者でも暗いところでのカードの確認もできます。

逆に銀行などのタッチパネル式のATMなどは、目の不自由な方には非常に不便であるというのを聞きます。

このようにちょっとした気配りのコンセプトやデザイン、設計などで障害者や高齢者が安心して使え、また、健常者にも使いやすいものを「共用品」といい現在開発も盛んです。

今後の商品の開発には、「バリアフリー」という問題は十分に考慮されるポイントであるといえます。しかし障害者や高齢者、そして健常者が自立した生き生きとした社会を送れる「バリアフリーの社会」の実現のためには、「共用品」や設備だけといったモノではなく、人々の相互理解やサービスといった身近にできるソフト面も大切です。

参 考 文 献

「バリアフリーの商品開発」E&Cプロジェクト編
(デザイン・工芸部)

Q₂: 焼酎蒸留粕の海洋投入が将来できなくなった場合どのような陸上処理が行われますか？

A₂: 処理法には大まかに農地還元（肥料化）、飼料化、プラント処理があり、その特徴を考慮して焼酎業界では検討を進めています。

(1) 農地還元（肥料化）

現在、特殊肥料として焼酎蒸留粕の21%が農地へ直接施用されていますが、最盛期の全量は大まかなえませんが、また、過剰散布による地下水汚染にも配慮しなければなりません。

一方、焼酎蒸留粕を堆肥の水分調整材や補助材として利用する方法も行われています。有効な処理法ではありますが、本県における堆肥の生産は過剰気味であり、できた堆肥の安定的な消費先の確保が必要です。

(2) 飼料化

家畜飼料としてそのまま与えて、これまで肉質の向上などに良好な成果を得ていますが、安定供給や夏場の腐敗対策が課題として残っています。

そこで、濃縮・乾燥して飼料にする方法が数多く提示されていますが、本方法は処理施設、ランニングコストがかかることや、できた飼料の安定的な流通機構の確保が必要となります。

(3) プラント処理

プラント処理の代表例は排水処理と焼却です。

焼酎蒸留粕は可溶性の高濃度有機物を含むため通常の排水施設では処理が困難であり、現時点では嫌気性処理と活性汚泥処理を組み合わせた方法が効果的です。ただし、処理効率を上げるために約2.5%以上含まれる固形分を極力除くことや装置の適切な維持管理が要求されます。

焼却する方法は、蒸留粕を固液分離して流動床燃焼炉で焼却や直接バーナーで焼却する方法が開発されています。これらの方法は、排水処理に比べて簡単で有効ですが、ランニングコストが燃料価格に依存していることと焼却灰の処分、燃焼排ガス対策を考慮しておかなければなりません。

採用にあたっては、工場の立地条件や長期的な将来の見通しを立てて行うことが大切です。

(食品工業部、化学部)